兼子諭著

『市民社会の文化社会学
——アレクサンダー市民圏論の検討を中心に』

評者：鈴木　宗徳

本書は，アメリカの社会学者であるジェフリー・アレクサンダー（1947–）の市民圏（civil sphere）論を扱った理論社会学の研究書である。アレクサンダーは社会学史のなかで教科書的にとり上げられることはあっても十分には紹介されてこなかったため，こうして専門的な研究成果が公刊されることは喜ばしい。また，本書が扱う市民社会（civil society）や公共性（public sphere）という主題は，ルソーやスミスなど18世紀思想や，アレントやハーバーマスなどドイツ出自の現代思想を手がかりに論じられることが多い。ハーバーマスとの違いに焦点をあてながらアレクサンダーの理論を論ずる本書を通して，その議論をアメリカ社会やアメリカ社会学の文脈に位置づけることが可能となるため，評者を含む欧州の社会学理論の研究者にとって極めて啓発的な内容となっている。さらに本書によれば，アレクサンダーの市民圏論はマス・メディアを介した集合的な世論形成の分析が特徴的であるため，メディア研究で行われてきたメディア・イベント論やメディア・フレーム分析とも，直接に接続している。理論社会学の研究者だけでなく，メディア・コミュニケーションを媒介とした世論形成に関心をもつ幅広い読者に薦めたい研究書である。

よく知られているように，ユルゲン・ハーバーマスの公共性論やコミュニケーション論は，その「理性」偏重が批判されてきた。功利的な利害関心，一時的な情動，反省以前的な伝統といったものを極力排することによってこそ，彼が規範的理想として示す理性的な討議は立ち現れる。本書の著者が強調するように，それゆえに彼の議論は直接的な対話と交渉を検討の主たる対象とし，認知的合理性や手続きの透明性を重視するのである。しかし公共圏で現実に行われているコミュニケーションを分析しようと思えば，メディア空間のなかで象徴を介して行われ，例えば社会運動や選挙の報道をめぐって行われる「表出的」で「情動的」なやりとりに注目せざるをえない。こうした現象を分析対象に据えるのが，アレクサンダーの市民圏論なのである。

評者なりに補足をすれば，象徴を用いたコミュニケーションの表出的で情動的な側面を（あるいは「戦略的」な側面も？），必ずしも公共圏から排除すべき要素とばかり考えることはできない。それは，その都度の立法や政治的な意思決定を，市民社会を基礎とした意見形成を通して正当化できるようにするうえで，全体社会の「統合」という課題を捨て去ることはできないからである。言い換えれば，社会を対立・分断に陥らせることなく，民主的で市民的ななんらかの合理性を備えた決定を導き出すためには，政治家をはじめ公職に就く人びとだけでなく社会運動やジャーナリズムの側も，情動を健全な仕方で喚起する戦略について自覚的であらざるをえないのである。そこまで著者が明確に言明しているわけではないものの，デュルケムからの影響を論じた4章における社会統合や「集合的沸騰」への言及，そして（追って紹介する）8章の「市民的回復」というユニークな

議論を読むと，こうした論点にまで想像が広がってゆく。

1．アレクサンダー「文化社会学」の理論史的位置づけ

全体で9章からなる本書のうち，第5章「アレクサンダー『文化社会学』の検討」より前の4つの章では，「文化社会学」と表現されるアレクサンダー理論の位置づけや成り立ちが論じられ，「象徴的な意味付与」をめぐる彼の立場が明らかにされる。まず，これについてごく簡単に紹介しよう。

第1章では，ハーバーマスの公共圏論との比較がなされる。『事実性と妥当性』に結実する彼の理論を紹介したうえで，認知主義・手続き主義に偏重した彼の立場からは，討議倫理においても感情の抑制が要件とされていること，政治的公共圏がマス・メディアに覆われると「良好な状況の下では」反省された世論を生み出すとされていること，公共圏や市民社会が「大規模な統合」に寄与するという認識が軽視されていること，など，重要な指摘がなされる。第2章では，タルコット・パーソンズの共同体論と影響力論が検討される。パーソンズは，近代社会における権力は，象徴的メディアとしての「影響力」によってはじめて正統化（正当化）されるとし，影響力の「信用創造」を行う機能を大学に見出している。ただし，ロバート・ベラーの市民宗教論が，リーダーシップの確立において市民の感情的共感に訴える表出的シンボリズムを重視するのに対し，パーソンズは共同体の統合をあくまで認知的シンボリズムの次元でしか捉えていないとされる。

第3章では，クリフォード・ギアーツの「文化社会学」の構想に対する，アレクサンダーによる受容と批判が論じられる。ギアーツが文化を社会構造から自律した独立変数と捉えていることをアレクサンダーは高く評価するものの，後のバリの闘鶏論の分析になると文化を社会的な地位構造に従属したものに還元してしまっていると批判する。第4章では逆に，アレクサンダーがエミール・デュルケムを，シンボリズムとしての宗教を独立変数と捉えているとして評価することが論じられる。さらに，集合感情を通じて共同体が道徳的に再確認・修復されるというデュルケムの社会統合の視座は，現代における道徳的な憲章の制定や重大な記念の会合にも適用可能であって，これをアレクサンダーが継承していることが指摘される。

これらの学説史的検討を踏まえ，第5章では，文化の自律性を強調し，ギアーツらの解釈学的文化理論と後期デュルケムの構造主義的文化理論を統合する，アレクサンダーの「構造主義的解釈学」の文化理論について論じられる。アレクサンダーはハビトゥスを外的構造の反映として説明するピエール・ブルデューを批判し，他者の意図の（真実性ではなく）「真正さ authenticity」を受け入れてゆく「儀礼に類する象徴的コミュニケーション」を重視する。アレクサンダーによれば，市民社会は「公的な劇場」であり，そこでコミュニケーションは「上演」＝パフォーマンスされる。こうした論点については，後続の各章で事例分析を通して具体的に説明がなされてゆく。

以上の議論のなかで印象的なのは，ギアーツやベラーといったアメリカの社会科学の成果をアレクサンダーが肯定的に摂取していることである。社会学史の研究としても，見過ごされた継承関係に光をあて，アメリカ独自の研究課題を浮き彫りにしていると言えよう。

2．ディスコースとパフォーマンスとしての公共圏

本書の中心を成すのは，以上につづく三つの

章，つまり第6章「市民社会のディスコース——市民社会の『言説』分析」，第7章「市民社会のパフォーマンス——市民社会の『演劇』分析」，そして第8章「市民圏の構造とその核心的な作動としての『市民的回復』」である。これらのなかで著者は，アレクサンダーの市民圏論を理論的に説明するとともに，彼自身やその後継者たちがこれを応用した事例分析を扱っている。

ベラーがリンカーンの演説をアメリカの市民宗教のディスコースとして読み解いたように，アレクサンダーは「民主主義的（市民的）である」か「民主主義に対抗的（反市民的）である」かという二項対立コードを用いて，市民社会のディスコースを読み解いている。このコードは，市民社会の成員を清浄か不浄かにふるい分けるカテゴリーでもある。この枠組みを用いて，ロナルド・ジェイコブズは，2001年のキング暴行事件報道を分析する。スピード違反を犯した黒人のキングに激しい暴行を加えたのが白人警察官であったため，翌年のロス・アンジェルス暴動のきっかけのひとつとなったとされる事件である。ジェイコブズの記事分析は，ひとつの事件を各紙が異なる「物語」ジャンルに沿って描いていることを明らかにし，アメリカ社会の分断や分裂を明るみに出す。アレクサンダーのディスコース分析の枠組みを用いて，複数の公共圏の間の緊張や対立を浮き彫りにすることができるのである。

先に述べたように，アレクサンダーは，社会的コミュニケーションを上演＝パフォーマンスとして捉えるが，それが「真正」であって「策術・偽物」ではないという印象を与えるよう工夫がなされることを解読しようとしている。事例として，オバマとマケインが争った2008年アメリカ大統領選挙のアレクサンダー自身による分析が挙げられる。この選挙は，内憂を解消することに秀でた「市民的英雄」としてのオバマか，外患を解消することに秀でた「軍事的英雄」としてのマケインか，という選択をめぐって争われた。マケインは自らのベトナム戦争での経験を演出に用い，オバマは過去に行った「反白人的発言」に見られる「怒れる黒人」のイメージを打ち消そうとしていた。マケインが選挙戦終盤で，金融危機に対応する「市民的英雄」への転換を試みて失敗したことを，アレクサンダーは指摘する。このように，自己とその敵とを「道徳的対立」として筋立てるよう，「脚本」「演出」「舞台装置」「演技」などがしつらえられ，オーディエンスにそれが「真正」であって「策術・偽物」ではないという印象を与える努力がなされるのである。

アレクサンダーは，民主主義が自動的に維持されると考えているわけではない。経済的不平等などによって市民圏が分断されるとき，彼が「市民的回復」と呼ぶ修正のプロセスが求められる。アレクサンダーは，公民権運動においてキング牧師が行ったパフォーマンスに注目する。キングは南部黒人層の苦境に対して北部白人からの共感を呼び起こすため，南部白人を「アメリカ民主主義にとっての汚点」として表象させるべく，自らの「非暴力的」なシット・イン運動に対し南部白人による行政が「抑圧的で暴力的」な反応をしているという対比を際立たせる戦略をとった。「非暴力を貫く抗議者を横暴な白人が弾圧する」という構図が報道を通じて北部に浸透し，こうして公民権運動はアメリカ史上類を見ない「市民的回復」の実例となったのである。

3.「対立・分断」と「回復・統合」の公共圏論に向けて

以上のように本書は，ディスコースとパフォーマンスを中心にコミュニケーションや世

論を分析する，アレクサンダーの市民圏論の魅力をしっかりと伝えている。評者の印象では，それは高度な汎用性を備えた完璧な分析ツールというわけではなく，いくつか限界も見られるようだが，著者はそうした側面についても冷静に指摘をしている。しかし，少なくとも本書を通読すれば，ハーバーマスの認知主義的・手続き主義的な公共圏論では，重大な側面が見落とされてしまうことが説得力をもって伝わってくる。

ただし逆に天邪鬼な読み方をすれば，表出的で情動的な側面に正しく光をあてるアレクサンダーには，こうした側面を楽観的に捉えすぎているきらいがあるとも言えないだろうか。著者は，アレクサンダーが用いる「民主主義的（市民的）である」か「民主主義に対抗的（反市民的）である」かの二項対立コードには疑問を呈しているが，これには評者も深く共感する。現実の政治対立においては，二つの陣営の一方が「民主主義的」で他方が「民主主義に対抗的」という形で双方にコードが割り振られて理解できる場合ばかりではなく，両陣営が互いを「民主主義に対抗的」だ，「反市民的」だ，と非難しあって決着がつかず，分断が深刻化し固定化することもあるだろう。アレクサンダーの二項対立コードの説明（103 頁）では，例えば「開放的」な側が市民的で，「秘密裡」な側が反市民的だとされるが，これに倣えば，例えば近頃のトランプ支持者の間で陰謀論をめぐって行われる「閉じた」コミュニケーションを「反市民的」だと形容して報道することは許されるだろう。しかし，陰謀論を信ずる側にとっては，「ディープステイトに操られている」「不正選挙を行う」民主党政権こそが「反市民的」なのだから，この対立を解消するような「市民的回復」が容易に達成できるようには思えない。現実に起きている対立・分断の深刻さを前に「統合」の希望はどこに見出せるのか。この著作を踏まえて，この点を考察することが求められているのだろう。

（兼子論著『市民社会の文化社会学――アレクサンダー市民圏論の検討を中心に』晃洋書房，2021 年 3 月，vi + 228 頁，定価 3,800 円＋税）

（すずき・むねのり　法政大学社会学部教授）